

氏名	柴田 みづき
ヨミガナ	シバタ ミヅキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第590号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 実験という見方—実験、観察、実感 / 想像のアンプリファイアー 〈作品〉 みることについて 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（論文第1副査）	千葉大学	准教授	（教育学部）	神野 真吾
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	0 JUN
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論では、〈実験〉という言葉が持つ意味や性質から、実験とは何かについて考え、その実験という言葉をもつ〈見方〉として機能させることの可能性について論じる。

実験という言葉を知ると想起される科学的な実験や実験室、または、試すという行為のようなイメージは、実験に対する固定観念となっているが、それ故に本来の実験の意味について考える機会を失くしている。実験は元来、繰り返し行う行為についての言葉である。その観点から発して〈実験〉という言葉をもつ美術はもちろん、その他多くの事例を基に考察し、意味を捉え直すことによって、〈実験という見方〉が可能かについて議論する。

本論は、序論・本論・結論と試論を組み合わせ構成されている。

序論では、問題定義として〈実験〉への捉え方を実験という言葉の持つ機能から発し、整理する。

実験はその性質として〈行為〉の要素を含むことから、この行為が、繰り返すことによって動き続けることで、まさに行為としての意味を可能にすることを述べている。

また、実験はその性質上〈過程である〉ことが〈ただの途中〉や〈試し〉であると軽視されやすいことを受けて、その〈過程〉という状態を維持することに目的を置くことで、過程は結果を含む目的と捉えることができる。その実験を繰り返すためには、積極的な偶然の取り込みが必要だとし、それら偶然による変化を受け入れることで時間の長さへの認識が拡張し、筆者の考える芸術表現へと繋がることを論じる。

本論第一章では、筆者が考える美術における実験の定義を定めている。実験は、失敗が可能であるということは、つまり反証が可能である状態だと言え、変化の追求を可能にすることが実験の一つの条件であると確認する。

また、反対に、動かしようのない確実な状態、つまり、経験を経ずとも結果を導くことができることは、実験とは呼べないものとした。

第二章では序論で述べた実験の〈行為〉としての性質がどのように作用するのかを、事例を参照しながら述べている。特に、剣道や茶道といった稽古を必要とするような活動に触れて育った筆者にとって、繰り返

して体得していくという考えは自然と身についたものであるが、それは筆者のみならず、如何なる人の社会生活においても同様に起こりうることを提示する。その上で、〈実験〉と呼びうる見方がどのような状況で起こりうるかを提示する。

第三章では、筆者の実験に対する定義に基づいて、選定した美術家の作品やその他の分野の実験を事例として取り上げる。

第四章では、筆者の自作から実験という見方での作例を紹介し、それらの実験が内包する問題点を提示すると共に、〈実験〉という途中を見る行為を改めて考えることで、その見方が叶った場合、想像の拡張や気付きが得られる可能性へと向かうことを述べている。

この論文によって、最終的に〈実験という見方〉への理解が得られることを目指す。

また、序論・本論を通して、筆者が日々書きつけている日常の気付きや想いを織り交ぜながら、自作や博士審査展での作品〈みることについて〉への手掛かりや、普段筆者が使う言葉について関わる物語などを組み合わせて論を展開している。

ものを見るという行為は、眼の構造も霊媒師も自然現象でさえも、経験や技術の繰り返しから成り立つと言える。様々な関係性を観察することが、見るという行為を成長させる。つまりは、繰り返し行われることの積み重ねの結果であると言える。それは、修行や訓練によって身体に経験を染み込ませ、悟りを得ようとする行為としての〈実験〉と呼ぶことができると考える。

実験という言葉は既に、〈みる〉という物の捉え方なのである。

#### (論文審査結果の要旨)

制作系の研究において求められる論理性は、一般的な論理ではなく表現的論理性とも呼びうるもので、ここに感性的な要素が含まれる点で、一般的な学術論文とは異なる形式で表される可能性が保証されるべきである。個別的な感性的経験を完全に一般化することは不可能であり、かつまた意味もない。それよりもむしろ、作品化へとつなげた後に、制作者および鑑賞者の作品経験として何が可能性として開かれているのかを、流動性や自由度を保証しながら制作者は想像し記述すべきであろう。

柴田みずきの本論文は、20世紀以降の美術が作品の完成形態の在り方に大きな変容を迫り、そのプロセスと作品の存在とが不可分のものであるということが広く理解されるようになった状況を踏まえた上で、そのプロセスに関わる作家自身の振る舞いや経験、記憶を連結、分断、交差させる様々な取り組みを「実験」と名付け、その可能性を探求し、独自の考察を推し進めた点に特徴がある。また、その取り組みの多層性、多面性とそれにより生じる「流動性」によって織りなされる変化を論理として立体的に表すために、思想や先行する芸術家の実践などを核とした論理的考察の部分と、それら考察を生む基盤にある感性的な材料を提供する経験的で、感覚的な記述の部分とで構成している。感性的な材料を他者に伝わるような文章表現として表すことで、本論の一般的な論理の枠組みと、その材料としての感性的経験とが相互に有効に機能しており、その点がきわめて特徴的であり、意欲的であるとも言える。論理的な部分にはやや甘さがあるものの、論理的な枠組みと感性的な材料とをどう扱うのかという制作系の研究論文の在り方を考える上でも、大変興味深い挑戦的な取り組みである点を評価したい。

本論考及び作品は、被験者としての作者の経験、考察、行為を言わば症例として示すことで、鑑賞者を同質のプロセスへと導く「場」や「機会」を提供する作品の構造とその可能性を明示しようとしている点に新規性がある。以上のことから博士論文として評価に値するものと考えられる。

#### (作品審査結果の要旨)

2018年12月14日、大学美術館展示室に於いて柴田みづきによる博士論文発表及びその後別室にてその審査が行われた。審査には主査小山保太郎先生、論文第一副査神野真吾先生(千葉大学)、作品第一副査0 JUN、

同副査三井田盛一郎先生の4人であたった。

論文発表は、作者の作家としての制作の方法、思考について「実験」というキーワードを中心に作者近年から修了制作と作品までの数々の実践報告と観察記録、またその行為性がはらむ私たちの時々の身体の様態や生ずる諸感覚について論考するものであった。芸術のなかでの「実験」の意味と定義について、「観察」という見る行為について、素材と構造が織り成す作品あるいは作品的な何物かを作り続ける「実感」としての営為について作者は任意のアーティストとその作品、また自身の剣道や茶、機織りなどの体験から得た経験を基に広く創造行為の領野について論考を試みている。論文副査の神野先生からは、芸術の領域における“実験”というからにはそのための“仮説”をどのように立てるのか？に更に踏み込んで書いてほしいとの意見があった。そういう意味でも、作者はこれまでの数多くの作品がどのような仮設の基にどのような実験を行い、結果（作品）に至ったのか、特に今展示作品について書いてよかったのではないか。展示作品はインスタレーションをその形式として様々な素材と形状の展示物を設置した。極力無駄を省き、それぞれの素材の質感を大事にし、床、壁面の散在する展示はやや明るさを落とした空間のなかで、互いの距離を測り、その場でこそその位置を定め、あるいは揺らぎ、明快に、時に曖昧に、鑑賞者を束の間深い空間へ誘い込むインスタレーションは非常に美しいものと映った。愁眉は、新作の巨大な壺の立体である。高さ3メートルはゆうにある壺状の容器が立っていて、天井からの吊りのテンションによってその表面は会期中に少しずつたわみ、その容姿を変貌させつつある。鑑賞者はその中に入ることが出来、見上げると壺の口が天に向かって開き天井が望める。壺の素材はチップ材を固めたような建材を使用し造形されているがその素材感は薄闇のなかで不思議と布のような肌理を感じず。また、壺中目の高さの程のところに覗き穴のような穴が穿たれ、そこから壺の外を眺める事ができるようになっている。そこでは壺のウチソトと自身のウチソトを重ね見る（想う）体験をする。作者はかつてエジプトで古代の埋葬品の壺を見たことからその造りと形状に人の内臓器官を重ねてあるビジョンを得た。以来、国内外の各地を移動しながらその時々場所場所で見たモノやコトを見納める器としてその場の土や素材を使って壺を作り続けた。ただ歩き続けること、見続けること、触れ続けること等これら反復行為のなかに見える気づきや変化、それに反応する身体の全体を創造行為とみなし表出してゆくこと、日々多年にわたる様々な体験的見聞、感覚の集合体として、一つの実験結果としてこの巨大な壺に至ったと考えれば今作品は作者のいうところの「実験」の証明とみることが出来る。審査の結果、実作品は、論文の未だ少し書き込みの及ばぬところを補って余りある結果として十分に評価出来るものとして審査員の全員が柴田みづきの論文、作品の審査結果を合格と判定した。

#### （総合審査結果の要旨）

柴田みづきは、論文においては、「実験」という言葉を多用して常々の制作行為を行なっている立場から、「実験」を〈見方〉として機能させようとしている。結果よりもその過程に重きを置き、過程の状態を維持すること、繰り返すこと、変化や偶然の取り込みが起こる「途中を見ること」を意識している。筆者がお稽古と呼ばれる茶道や剣道の修練のなかで体得したものの見方、自分自身を含めて一つ異なる位置から観察する見方を繰り返しのお稽古中で体得して身につけてきたことがこの考え方に至る背景にある。

これまでに実際に行なった自作の作例から考察を進めている。その一つである〈PRIMITIVE ACT〉では、PRIMITIVE（初源的）な行いの過程を鑑賞してもらうことで、ARTと呼び始める瞬間を発見する仕組みを提示しようとしている。別の試みでは〈行い続けた結果、初源になる〉という考えを仮定し、歩き続ける、水を運ぶことを繰り返すというパフォーマンスを行なっている。

〈つばなんかをつくる〉という作品は、筆者が出かけた様々な土地・場所で幾度となく行われてきている。「見入る」形であるという“つばのようなもの”をその土地の土、落ちている塵などを集めて作るのである、作ることを通して観察をしていると同時に、作っている筆者自身も観察されている。その作る行為をしている時間は、様々な関係性を観察する時間で、それは見るという行為を成長させると云う。

論文では、本論を進める中に試論という短い筆者の思惟・思索などが入れ子のように挿入されている。筆者はあえて自由な思考の試みを本論文でも行なっている。思考が一つのものに収斂して行くのではなく、拡散・拡張して行く動きが積極的にもたらされるように組み立てている。整合性のある筋道に回収されない、日常に発見される気付きや想いが語られるが、これらは筆者が日常の中でも意識を拡張して見出してきているものの一つなのだと理解できる。同時に挿入される「コラージュ」がある、日課として作られたこれらのものは、紙片の色や形の対比を見て取り、その取り合わせを考えて作られていると云う。それらは、別のリズムや別の構造で視覚的に提示されたが、しかし、何かしら“同じもの”を眺めることができる。これらの思惟や断片的なコラージュを論考の中に入れ込むと云うことは、制作者ならではの試みであり、審査委員の中でも重要視している事柄である。感覚的なことや流動的なこと、感性的なものを如何に記述するかということに自身の方法を活かして挑んでいることを評価しているのである。

博士審査展での作品も“つぼのようなもの”が作られている、「みることについて」と題され、観察の実験が展示期間中も行われていた。木屑を集めて接着剤で固めて作られた“つぼのようなもの”は、中に鑑賞者が入って中からも覗くことができるほどの大きさがある。ワイヤーで吊り下げられて辛うじて“つぼのような”かたちを保持しているが日々変化して緩く垂れ下がり続ける。制作者の柴田自身もそこにて観察をし、そこに関わる行為を続けている。そして鑑賞者にも観察され観察する同じ機会が与えられている。そのような構造の場を作り、実験をし続ける姿勢を高く評価している。また、作品はその実験の中でも柔らかく美的な印象を持っていると云う指摘・評価があった。柴田の経験の積み重ねによる姿勢や、これまでの修練の中で培われたものの反映でもありと考えられる。柴田みづきの論文と作品を博士学位に相応しい優れたものと評価し合格とする。